

バイオ戦略の全体目標の評価に関する 基本的考え方(案)



令和4年4月

内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局

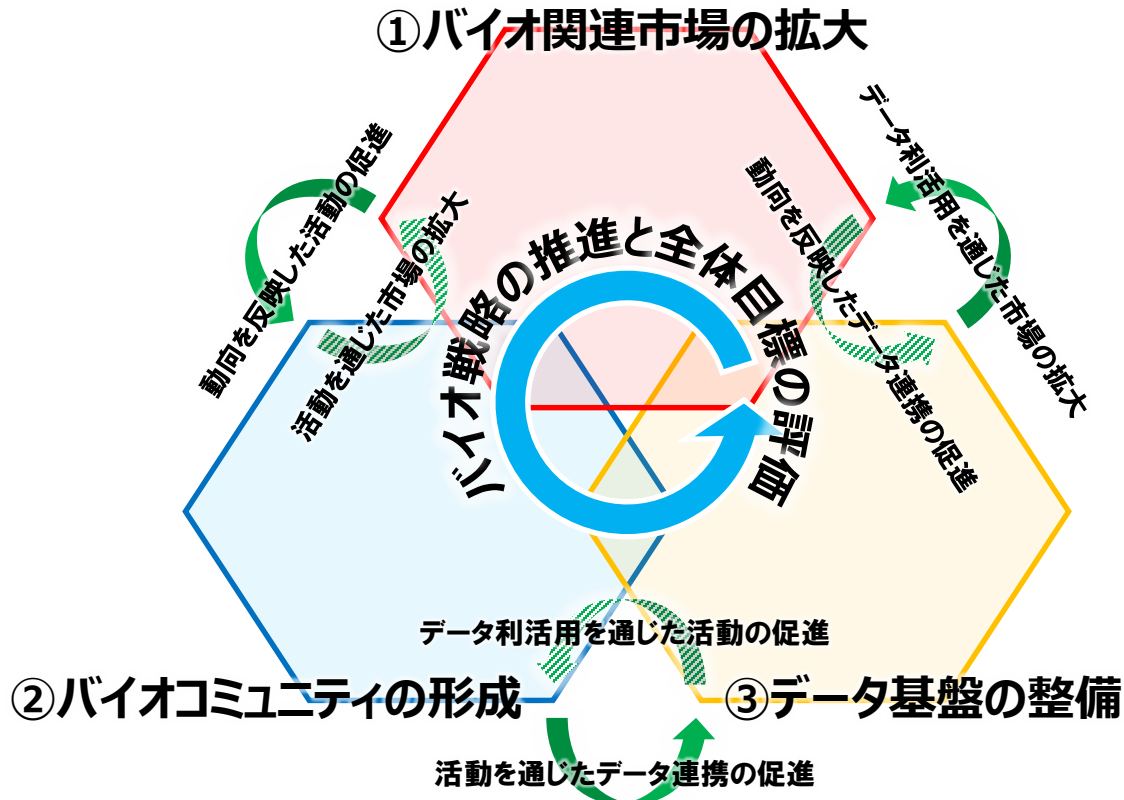
I. 評価目的・体系	… 2
– 全体目標の評価の狙い	
– 定量面の評価と定性面の評価の役割分担	
– 全体目標の評価体系	
II. 評価スケジュール	… 6
– 2030年に向けた全体目標の評価の見通し	
– 全体目標の評価スケジュール（想定）	
III. 指標・評価方法	… 9
– 具体的な評価方法	
– バイオ戦略のロジックチャート	
– 指標に関する情報の把握体制・方法・頻度	
– 【参考】 関連指標の例	
– バイオエコノミーの成熟に関するレベルと基準	
IV. 参考資料	… 16



評価目的・体系

全体目標の評価の狙い

- ◆ 「2030年に世界最先端のバイオエコミー社会を実現」という全体目標の達成に向け、バイオ戦略の核となる①バイオ関連市場の拡大、②バイオコミュニティの形成、③データ基盤の整備を相互に連携させ、効果的・効率的に推進するため、進捗状況のモニタリングを含め、バイオ戦略全体を俯瞰した評価を実施
- ◆ 全体目標の評価においては、我が国の強みに基づき、国内外から人材・投資を呼び込むための国際的なベンチマークとして指標を活用することで、我が国のバイオ分野が世界最先端の水準にあることの対外的な発信に資するよう留意し、これを契機として関係者が一丸となってバイオエコミー拡大に取り組む機運の醸成を図る
- ◆ このような観点から、全体目標の評価スケジュールを策定するとともに、評価に用いる指標やその把握体制・方法・頻度を含む具体的な評価方法について、有識者会議で決定
- ◆ バイオ戦略を巡る情勢変化等に迅速に対応していくため、今後はタスクフォースにおいて、これらの柔軟な見直しを可能とする



定量面の評価と定性面の評価の役割分担

- ◆ 全体目標の評価は、有識者会議において、**定量面と定性面の両面**から実施することを想定
- ◆ これらの役割分野については、**全体目標からのバックキャスト**により評価・モニタリングの対象とすべき情報を精査の上、当該情報の**定量的な把握の適否**に応じて検討

【定量面の評価(定量的な把握に適した情報が対象)の役割】

- ◆ バイオ戦略においては、バイオエコミーへの世界的な潮流を捉え、バイオ関連市場の中でも、我が国の強みを生かしつつ、大きな成長が見込める分野について、**市場領域ごとに2030年時点の市場規模目標**を設定
- ◆ これは、「持続的な経済成長」と「社会的課題の解決」の両立に資するバイオエコミーにとって、**経済的価値**はもとより**環境的・社会的価値**も重要であるところ、バイオエコミーの推進の鍵となるバイオ関連市場の拡大には、これらの価値が直接的又は間接的に包含されることから、まずは市場規模を把握すべき指標に据えたもの
- ◆ そこで、定量面では、「**市場領域の拡大**」を中心に、バイオ戦略の進捗状況を評価することを目的とする

【定性面の評価(定量的な把握に適さない情報が対象)の役割】

- ◆ バイオ戦略においては、単にバイオエコミーを志向するだけでなく、それが「**世界最先端**」の水準となることを求めている
- ◆ あわせて、バイオエコミーを「**バイオファースト発想**」、「**バイオコミュニティ形成**」、「**バイオデータ駆動**」の三つの要素に分解しており、これらがそれぞれどのようなレベルで実現しているかを把握することが必要
- ◆ そこで、定性面では、「**バイオエコミーの成熟**」を中心に、バイオ戦略の進捗状況を評価することを目的とする

全体目標の評価体系

- 「2030年に世界最先端のバイオエコノミー社会を実現」という全体目標を定量面・定性面から評価
- 評価では、個々の取組を改善するよりも、**バイオ戦略全体を俯瞰し、核となる取組の相互連携及び効果的・効率的な推進を図りつつ、我が国のバイオ分野における強みを対外的に発信することに主眼を置く**

全体目標

「2030年に世界最先端のバイオエコノミー社会を実現」

「市場領域の拡大」を中心に評価

「バイオエコノミーの成熟」を中心に評価

定量面の評価

KGI（重要目標達成指標）

2030年の我が国全体のバイオエコノミー市場規模目標

設定済み

総額92兆円

KPI（重要業績評価指標）

2030年の各市場領域の市場規模目標（9つの市場領域）

設定済み

モニタリング指標

指標の性質に合わせ、市場領域横断的又は市場領域ごとに取りまとめ。バイオ戦略の進捗状況を踏まえ、必要な指標のKPI化を検討

バイオ分野の投資額

国際連携（例：主要展示会の海外参加企業数）

バイオコミュニティの取組状況

定性面の評価

定性的指標

以下の要素ごとにレベルと基準を設定し評価

バイオファースト発想

バイオコミュニティ形成

バイオデータ駆動

バイオ分野の雇用者数

企業のバイオ戦略認知度（例：バイオコミュニティの参画企業数）

市場領域ロードマップの推進状況

等

各指標については、国内外における情勢変化や市場領域ロードマップのステージゲート移行等の適切なタイミングで見直しの可否を検討

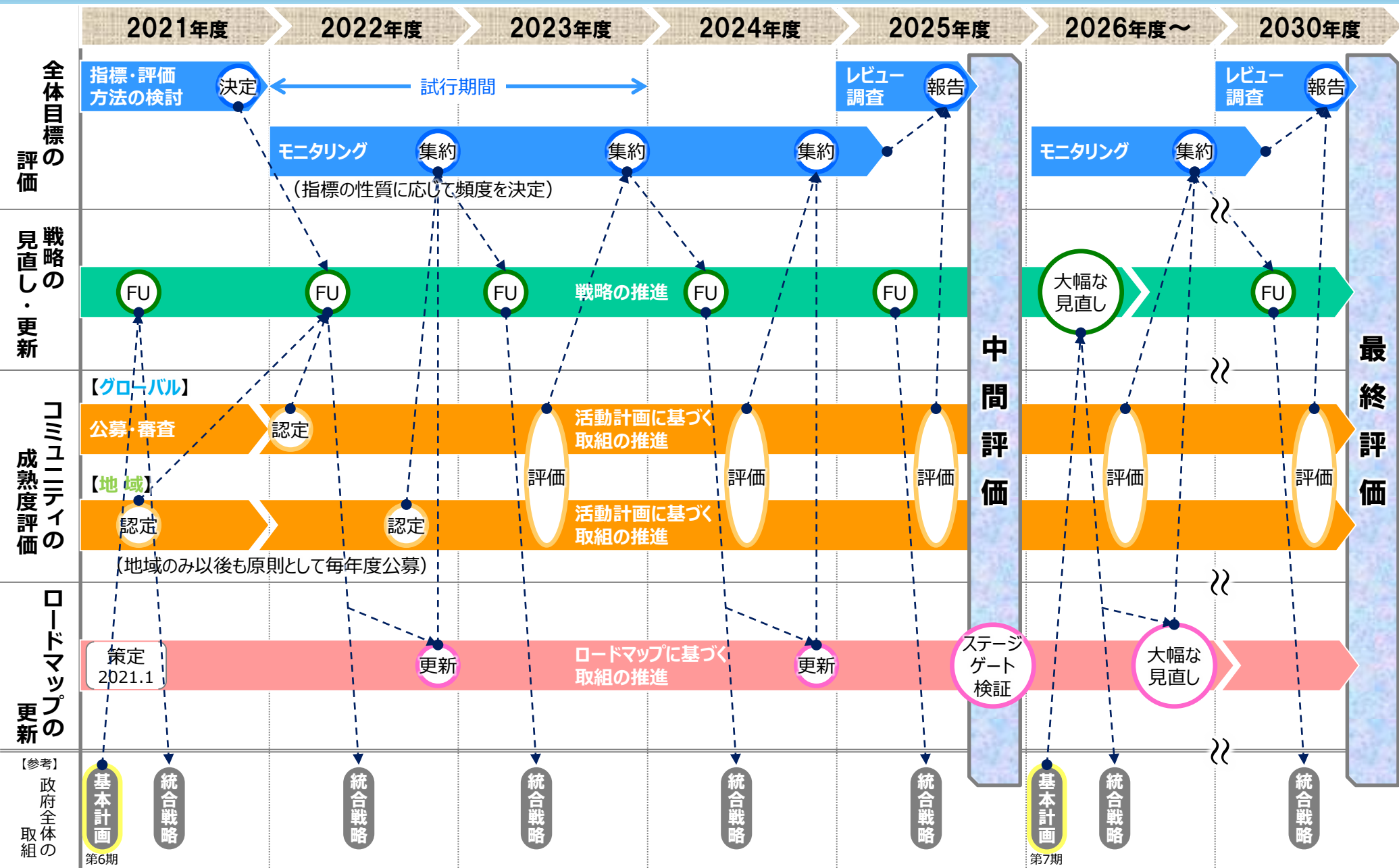


評価スケジュール

2030年に向けた全体目標の評価の見通し

- ◆ 定量面・定性面からの全体目標の評価については、有識者会議において、**2025年度末に中間評価**(市場領域ロードマップのステージを適切に移行できたかの検証を含む)、**2030年度末に最終評価**を実施
- ◆ その準備として、**2025年度及び2030年度**に、内閣府科技において、関係府省庁や業界団体等の協力を得つつ、中間評価及び最終評価に向けて必要な情報を収集・分析するための**レビュー調査**を実施。関係府省庁においても、各市場領域の市場規模の把握をはじめ、個別に必要な調査を実施
- ◆ **各レビュー調査の前年度までは**、バイオコミュニティの成熟度評価や市場領域ロードマップの更新等の成果も活用しながら、内閣府及び市場領域ロードマップ取りまとめ省庁を中心に、**指標のモニタリング**を継続(モニタリングの頻度については、指標ごとに、調査等の頻度が異なることから、その性質に応じて決定)
- ◆ モニタリングを通じて集約した情報は、翌年度の**バイオ戦略の見直し・更新**に向けたフォローアップに反映
- ◆ **バイオコミュニティの成熟度評価**については、2022年4月頃にグローバルバイオコミュニティの認定を目指していることに鑑み、2023年度から開始し、**原則として毎年度実施**
- ◆ **市場領域ロードマップの更新**については、昨今のバイオ分野を取り巻く情勢変化の速さに鑑み、**例えば2年ごと**に、当該年度のバイオ戦略の見直し・更新に向けたフォローアップとの整合性を確保する観点から実施。更新の際には、市場規模目標やその時点での市場規模についても可能な範囲で検証
- ◆ **2022年度から2023年度**にかけては、バイオ戦略の見直し・更新に向けたフォローアップ、バイオコミュニティの成熟度評価及びロードマップの更新といった一連のプロセスが初めて実行可能になると見込まれることから、これを、2021年度に決定する指標・評価方法の実行可能性を確認するための**試行期間**と位置付け
- ◆ 試行結果から改善点を抽出し、今後の**プロセス間の連携強化**に生かすとともに、**評価スケジュールの見直し**の可否を検討
- ◆ なお、評価スケジュールについては、全体目標の達成に向けて常に最適な方策を講ずる観点から、試行期間にかかわらず、バイオ戦略の**進捗状況に応じて柔軟に見直す**

全体目標の評価スケジュール(想定)



全体目標の達成に向けて常に最適な方策を講ずる観点から、バイオ戦略の進捗状況に応じて柔軟に見直す



指標・評価方法

具体的な評価方法①

【評価方法の総論】

- ◆ 全体目標の評価に当たっては、「**バイオ戦略のロジックチャート**」を念頭に置くことにより、バイオエコノミーが拓く「**4つの社会像**」、社会像の実現に必要な「**9つの市場領域**」、目標達成に向けた「**5つの基本方針**」の関係性に留意しながら、バイオ戦略全体を俯瞰
- ◆ 評価の結果、バイオ戦略の核となる①バイオ関連市場の拡大、②バイオコミュニティの形成、③データ基盤の整備について、**成果**や**課題**を明らかにし、これらを相互に連携させ、効果的・効率的に推進する観点から、**今後の取組指針**を得ることを目指す
- ◆ 評価に不可欠な進捗状況のモニタリングを可能とするため、「**指標に関する情報の把握体制・方法・頻度**」に基づき、ロジックチャート上の**主要指標**（バイオ戦略において目指す主要な**数値目標**）及び**指標**に関する情報を把握
※「指標に関する情報の把握体制・方法・頻度」に挙げられていない指標の取扱いについては、引き続き検討
- ◆ 定性面の評価では、モニタリング指標も参考としつつ、「**バイオエコノミーの成熟に関するレベルと基準**」に基づき、「**バイオファースト発想**」、「**バイオコミュニティ形成**」、「**バイオデータ駆動**」の三つの要素がそれぞれどのようなレベルで実現しているかを把握

【指標の考え方】

- ◆ 指標については、それに関する情報の把握が可能、かつ、なるべく容易であることを前提に、我が国の強みに立脚するなどして、我が国のバイオ分野が**世界最先端の水準にあるというメッセージを対外的に発信**※し、そこに国内外から人材・投資を呼び込むための**国際的なベンチマークとして機能するものを設定**
※発信に当たっては、国際的な客観性の担保が重要であることに鑑み、例えば欧米で見られるように、技術成熟度レベル（TRL）に加え、製造インフラ成熟度レベル（MRL）やサプライチェーン成熟度レベル（SCRL）を一体的に捉え、研究開発から社会実装までをつなぐ拠点の能力を分析するなど、「世界の共通言語」にも留意
- ◆ なお、各指標については、バイオ戦略の進捗状況を踏まえ、必要な場合にはKPI化を図る（主要指標に位置付ける）一方で、国内外における情勢変化や市場領域ロードマップのステージゲート移行等のタイミングを捉え、**見直しの要否を検討**し、バイオ戦略の推進に直結する**機動的なモニタリング**を追求

具体的な評価方法②

【情報の把握体制・方法】

- ◆ 指標の性質に応じ、市場領域横断的又は市場領域ごとなど適切な取りまとめ方法に留意しながら、**内閣府科技と関係省庁等の連携・協力**により、指標に関する情報を把握
- ◆ その際、内閣府や関係省庁等が実施する**各種調査**はもとより、**バイオコミュニティの成熟度評価**や**市場領域ロードマップの更新**、**各種施策の評価**等を活用し、例えば各バイオコミュニティの活動計画において設定された目標・指標や各市場領域ロードマップにおいて設定されたステージゲート、各種施策の目標・指標等からの情報を収集・分析することで、評価の**効率と連動性**を向上

【情報の把握頻度】

- ◆ 指標の政策的重要性に加え、それに関する情報を把握する難易度も重視しつつ、毎年のフォローアップや全体目標の評価スケジュール、各種調査等の頻度を勘案した上で、**評価疲れを回避**する観点から、指標ごとに最適な把握頻度を設定

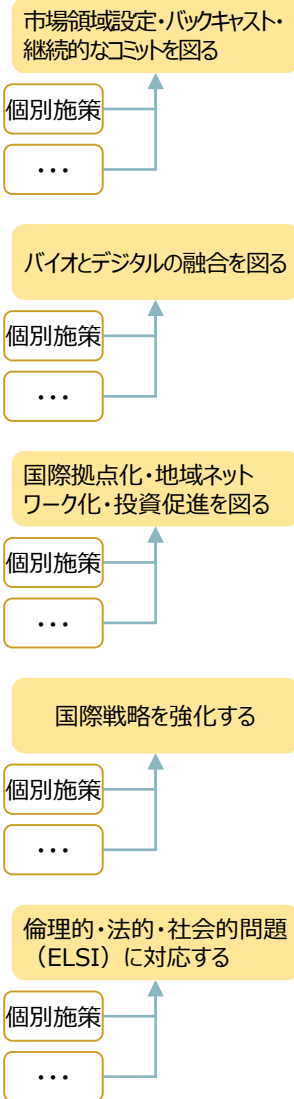
【今後の検討課題】

- ◆ ここに提示した評価方法の運用状況は、全体目標の達成に向けて常に最適な方策を講ずる観点から、継続的に検証されるべきであり、バイオ戦略の**進捗状況に応じて柔軟に見直す**
- ◆ 2023年度までの試行期間中、評価に用いる情報を把握するための**エビデンスシステム(e-CSTI)**の活用や、**評価専門調査会**における第6期基本計画の評価との連携をはじめ、科学技術・イノベーション政策全体の動向を注視しつつ、評価の改善に取り組むことで、他分野への波及も視野に入れた戦略の**フォローアップモデルを確立**するための検討を進める
- ◆ 「**バイオエコノミーの成熟に関するレベルと基準**」については、2023年度からのバイオコミュニティの成熟度評価の開始に向けた検討状況等を踏まえ、その**内容をブラッシュアップ**していくことが必要

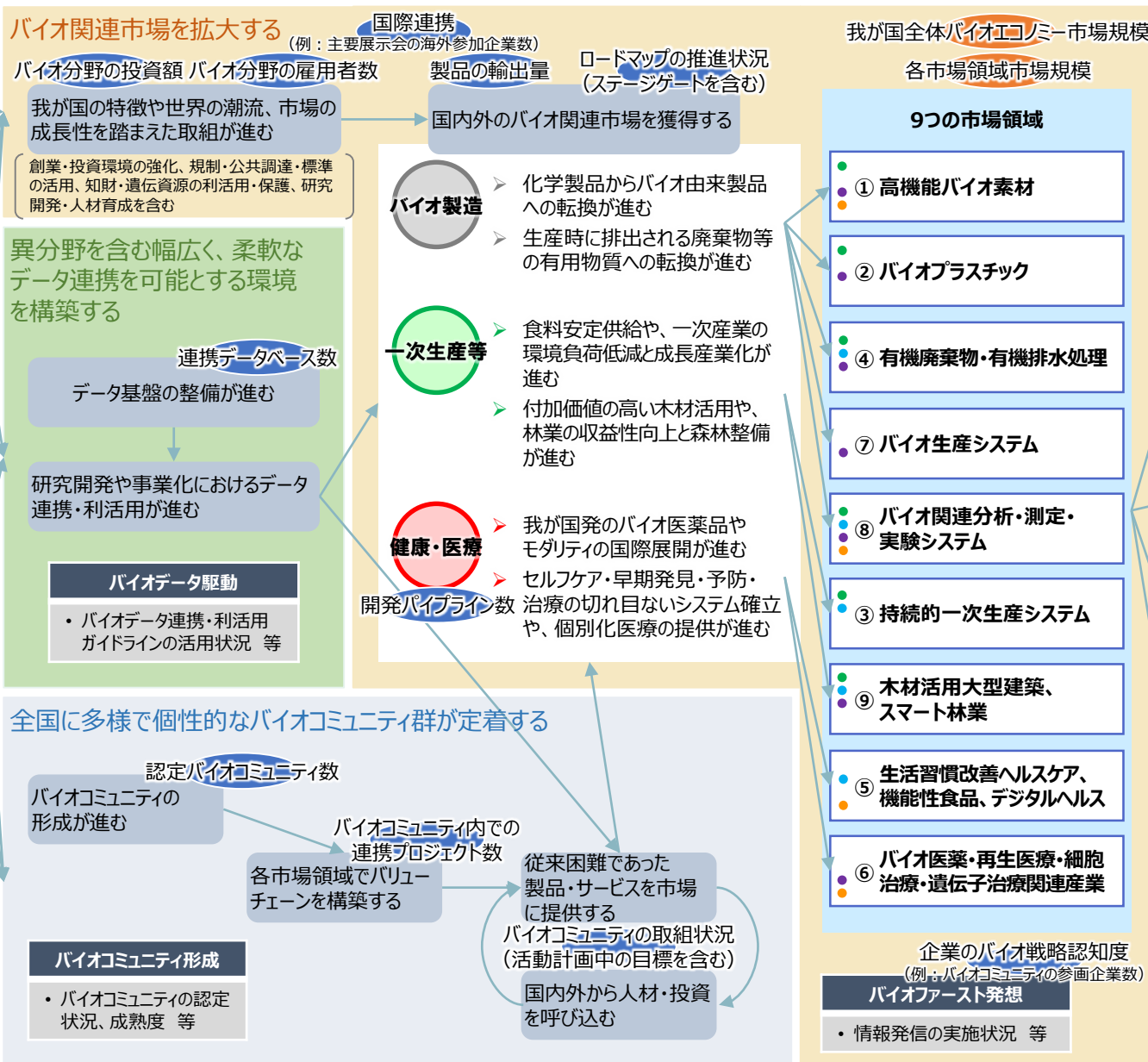
バイオ戦略のロジックチャート

プログラム

5つの基本方針



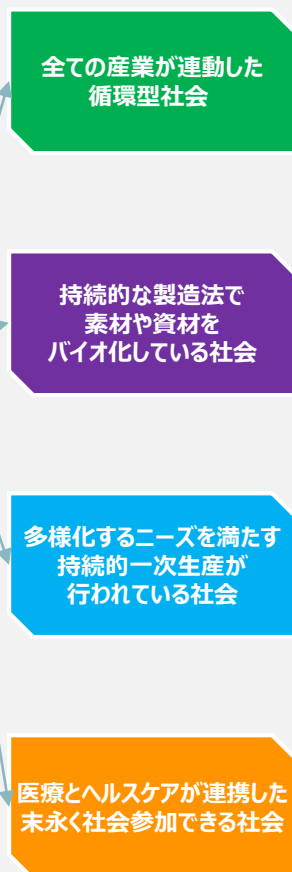
中目標



大目標

2030年に世界最先端のバイオエコノミー社会を実現

4つの社会像



指標に関する情報の把握体制・方法・頻度

分類	指標	取りまとめ	把握方法（データソース等）	把握頻度	
K G I	主要指標	我が国全体バイオエコノミー市場規模	内閣府科技 <ul style="list-style-type: none"> 委託調査 KPIである各市場領域市場規模を集計 	2025年度 2030年度 (ほか必要に応じて)	
	主要指標	各市場領域市場規模	各市場領域 取りまとめ省庁 <ul style="list-style-type: none"> 各市場領域取りまとめ省庁が定める方法 	2025年度 2030年度 (ほか必要に応じて)	
モ ニ タ リ ン グ 指 標	参考指標	バイオ分野の投資額	内閣府科技、 各市場領域 取りまとめ省庁 <ul style="list-style-type: none"> 委託調査又はベンチャー白書のデータ等 	隔年以上	
	参考指標	バイオ分野の雇用者数	内閣府科技、 各市場領域 取りまとめ省庁 <ul style="list-style-type: none"> 委託調査等 	隔年以上	
	参考指標	国際連携 (例：主要展示会の海外参加企業数)	業界団体（JBA）	<ul style="list-style-type: none"> BioJapanの実績 	毎年
	参考指標	企業のバイオ戦略認知度 (例：バイオコミュニティの参画企業数)	内閣府科技	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティの成熟度評価 	毎年
	参考指標	認定バイオコミュニティ数	内閣府科技	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティの成熟度評価 	毎年
	参考指標	バイオコミュニティ内での 連携プロジェクト数	内閣府科技	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティの成熟度評価 	毎年
	参考指標	バイオコミュニティの取組状況 (活動計画中の目標を含む)	内閣府科技	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティの成熟度評価 	毎年
	参考指標	ロードマップの推進状況 (ステージゲートを含む)	各市場領域 取りまとめ省庁	<ul style="list-style-type: none"> ロードマップの更新 	2年ごと

市場領域ロードマップにおいて設定

【バイオ製造】

- ターゲットとするバイオ素材と候補微生物の選定数
- バイオフィャンドリにおける生産量
- バイオプラスチックの導入量

【一次産業等】

- 農業従事者のデータ活用割合
- 木材活用大型建築の新築着工面積
- ゲノム編集等の革新的技術を活用した開発品種数
- スマート農業関連機器の普及台数

【健康・医療】

- 健康・医療産業のベンチャー投資金額
- 大規模実証事業でのエビデンス取得に関するフィールドの確保数
- バイオフィャンドリの利用実績
- 新規市場参入企業数

地域バイオコミュニティにおいて設定

【北海道プライムバイオコミュニティ】

- 新規就農者数
- 新規漁業就業者数
- 農林水産業生産額
- 道産木材の利用量

【鶴岡バイオコミュニティ】

- バイオ素材の生産量
- 市場規模
- 雇用者数
- マイクロプラスチック及びCO₂排出削減量
- スタートアップ創出数

【長岡バイオコミュニティ】

- 生産から消費・再資源化までのバリューチェーンにおける資源循環率（窒素循環率）
- CO₂排出削減量
- 市内関連企業の売上

【福岡バイオコミュニティ】

- 市場規模
- CO₂排出削減量
- バイオ関連企業増加数
- スタートアップ企業数・IPO企業数

バイオエコノミーの成熟に関するレベルと基準

- 指標に関する情報等を踏まえ、**基準に照らし、我が国のバイオエコノミーの各要素がどのレベルにあるかを定性的に判定することにより、バイオエコノミーの成熟の観点から、バイオ戦略の進捗状況を評価**
- **基準やレベルの可視化を通じ、関係者が一丸となって大目標のバイオエコノミー実現に取り組む機運を醸成**

要素	バイオファースト発想	バイオコミュニティ形成	バイオデータ駆動
関連する中目標	バイオ関連市場を拡大する	全国に多様で個性的なバイオコミュニティ群が定着する	異分野を含む幅広く、柔軟なデータ連携を可能とする環境を構築する
☆☆☆	レベル 3 世界と伍するバイオエコノミー社会		
☆☆☆	<ul style="list-style-type: none"> □【認知度】 経済社会のあらゆる場面でバイオの力が活用され、<u>市民レベル</u>でバイオエコノミーの重要性が浸透 □【市場】 日本企業が<u>国内外</u>のバイオ関連市場をけん引しつつ、「<u>持続的な経済成長</u>」と「<u>社会課題の解決</u>」を両立 	<ul style="list-style-type: none"> □【質・量】 世界のハブとなるグローバルバイオコミュニティと特色ある地域バイオコミュニティが有機的に連携し、<u>切磋琢磨</u>し合って<u>相乗効果</u>を発揮 □【国際性】 我が国のバイオコミュニティが世界から注目される<u>ブランド</u>として確立し、<u>ヒト・モノ・カネの好循環</u>が実現 	<ul style="list-style-type: none"> □【連携】 <u>各種施策</u>との連動の下、<u>膨大な数のデータベースの分野横断的な連携</u>を進め、バイオデータから価値を創出する仕組みを整備 □【利活用】 バイオ分野の多種多様なデータを起点として<u>異分野融合</u>を促進し、研究開発や社会実装を強化
☆☆	レベル 2 発展途上のバイオエコノミー社会		
☆☆	<ul style="list-style-type: none"> □【認知度】 未来社会に変革をもたらす振興技術として、バイオが果たしうる<u>役割の根本的な変化</u>に対する認識が<u>産学官</u>で拡大 □【市場】 <u>既存産業のバイオ化</u>や<u>新産業の創出</u>が進み、バイオ関連市場が拡大 	<ul style="list-style-type: none"> □【質・量】 各バイオコミュニティの<u>特徴</u>や構成主体の<u>役割</u>が明確になり、革新的な製品・サービスを生み出す<u>バリューチェーン</u>を構築 □【国際性】 バイオコミュニティを核とした国際連携・協力を展開し、<u>人材・投資の呼び込み</u>や<u>製品・サービスの提供</u>を促進 	<ul style="list-style-type: none"> □【連携】 政府全体の共通の取組を前提に、世界に類を見ない<u>分野内のデータベースの連携</u>を進め、研究開発・事業化に資するデータ基盤を構築 □【利活用】 バイオ分野における市場獲得を目的として、データをつなげて利活用する<u>具体的な取組</u>が幅広く実践
☆	レベル 1 緒に就いたバイオエコノミー社会		
☆	<ul style="list-style-type: none"> □【認知度】 <u>政府</u>や<u>産業界の一部</u>がバイオエコノミーの重要性を認識 □【市場】 既存の<u>バイオ産業</u>を中心に、<u>循環型</u>の経済社会を志向 	<ul style="list-style-type: none"> □【質・量】 <u>日本全国</u>に<u>認定</u>を受けたバイオコミュニティ群が形成 □【国際性】 各バイオコミュニティが<u>海外を視野</u>に入れた<u>活動計画</u>を策定 	<ul style="list-style-type: none"> □【連携】 多岐にわたる領域をカバーするバイオ分野の特徴を踏まえ、<u>(国際)相互運用性</u>を勘案し、必要なデータ基盤の構築について<u>検討</u> □【利活用】 データ連携・利活用の<u>ノウハウ</u>を蓄積し、そのローコスト化を図るなどして、<u>連携・利活用ニーズ</u>を拡大
指標以外の情報の例	・ 情報発信の実施状況 等	・ バイオコミュニティの認定状況、成熟度 等	・ バイオデータ連携・利活用ガイドラインの活用状況 等



參考資料

バイオ戦略における経緯①

- ◆ 2019年6月、「バイオ戦略2019」では、全体目標である「世界最先端のバイオエコノミー社会」とは、以下の三つの要素が実現している状態を想定

① バイオフィースト発想

- ・ 持続可能な生産と循環によるSociety 5.0の実現のために、バイオについての倫理的・法的・社会的問題について議論できる環境の下、まずバイオでできることから考え、行動を起こせる社会を実現

② バイオコミュニティ形成

- ・ 経営者をはじめ社会を主導する立場の者から市民に至るまでバイオフィースト発想が根付き、国際連携・分野融合・オープンイノベーションを基本とし、世界のデータ・人材・投資・研究の触媒となるような魅力ある国際的なコミュニティを形成
- ・ 国際的なコミュニティが中核となり、各地域とのネットワークが構築され、ヒト・モノ・カネの好循環が生まれ、各々特色あるバイオによる持続可能な循環型コミュニティ・健康的な生活を送れるコミュニティを形成
- ・ これらのコミュニティ群を、我が国のバイオエコノミー社会の姿として世界に示し、国内外から共感される「バイオコミュニティ」モデルを世界展開

③ バイオデータ駆動

- ・ バイオとデジタルの融合により、生物活動のデータ化等も含めてデータ基盤を構築し、それを最大限活用することにより産業・研究が発展
- ・ 国際標準となる測定法・測定機器を生産システムに組み込み、世界で一番生物の活動をデータにできる国を実現

- ◆ また、過去のバイオ分野の戦略を総括した反省点の一つとして、「戦略への産官学の連携的コミットの欠如(KPIなし、不十分なフォローアップ)」を挙げた

バイオ戦略における経緯②

◆ そこで、全体目標の設定と合わせ、

- ✓ 2019年度中に、継続的に**戦略全体の状況を把握するKPI**(具体的施策の実行状況を評価するための定量的指標)について、その**データ取得体制、国際情勢等を含め官民で検討し、設定**すること
- ✓ 2019年度中に、バイオ戦略に基づき、**KPIを設定した市場領域ごとのロードマップを策定**すること

を目指すこととしつつ、バイオ戦略のKPIの設定に当たっての課題として、以下の2点を指摘

- ① 民間出版社が毎年集計しているバイオ関連市場規模は、範囲を狭く捉えている
- ② バイオ分野の雇用、投資額、バイオベンチャーの時価総額等を持続的に把握する社会システムが存在しない

◆ さらに、2020年1月の有識者提言において、定量評価・定性評価からなる全体目標の評価が提案されたことを受け、2020年6月、「バイオ戦略2020(基盤的施策)」では、以下を掲げた

- ✓ バイオ戦略は、**全体目標の評価、市場領域ロードマップの推進・更新、バイオコミュニティの認定、各種ガイドラインの策定を相互に連携**させることにより推進すること
- ✓ 全体目標の評価について、**KPIを設定し、定量面、定性面から有識者会議で評価を実施**すること
- ✓ 2021年度半ばまでに全体目標の**評価スケジュールを策定**すること
- ✓ 2021年度半ばまでに、業界団体等の参画を得た上で、評価に用いる**指標の把握体制・方法・頻度を含む具体的な評価方法について、バイオ戦略タスクフォースでの検討**を経た上で、具体的な評価方法について**有識者会議で決定**すること

◆ その後、市場領域ロードマップを2021年1月に策定するとともに、「バイオ戦略2020(市場領域施策確定版)」では、

- ✓ バイオ戦略については、フォローアップを行い、その結果を踏まえ、**毎年見直しを行い、更新**すること

を掲げた上で、2021年6月、「バイオ戦略フォローアップ」において、全体目標の評価や市場領域ロードマップの更新について、以下のとおり整理したところ

バイオ戦略における経緯③

(1) 全体目標の評価

① 概要

- ・ **【維持】** 全体目標の評価は有識者会議において、定量面、定性面から実施。【**科技**】
- ・ **【維持】** 2021年度半ばまでに全体目標の評価スケジュールを策定。【**科技**】
- ・ **【維持】** 資金配分機関等において、バイオ分野の評価、検証が可能な体制整備を促進。【**科技**】

② 定量面の評価

- ・ **【変更】** 2021年度中に、市場領域ロードマップの更新と合わせ、業界団体等の参画を得た上で、エビデンスシステム (e-CSTI) 等も活用し、定量面の評価に用いる指標の把握体制・方法・頻度を含む具体的な評価方法について、バイオ戦略タスクフォースでの検討を経た上で、具体的な評価方法について有識者会議で決定。【**健康医療、科技、農、経**】

〔指標例〕

- 我が国のバイオエコノミー市場規模（国内生産相当額（輸出を含む）及び我が国企業の海外生産相当額の推計）
- 各市場領域の市場規模^[1]
- バイオ分野の投資額
- バイオ分野の雇用人数
- 国際連携（バイオ分野の主要展示会の海外参加企業数）
- 企業のバイオ戦略認知度（グローバルバイオコミュニティ及び地域バイオコミュニティに参画している企業数）

③ 定性面の評価

- ・ **【変更】** 2021年度中に、市場領域ロードマップの更新と合わせ、業界団体等の参画を得た上で、エビデンスシステム (e-CSTI) 等も活用し、定性面の評価に用いる情報の把握体制・方法・頻度を含む具体的な評価方法について、バイオ戦略タスクフォースでの検討を経た上で、具体的な評価方法^[2]について、有識者会議で決定。【**健康医療、科技、農、経**】

〔情報例〕

- グローバルバイオコミュニティ及び地域バイオコミュニティのネットワーク機関が行う各機関の評価・認定の状況
- 市場領域ロードマップの推進状況

(2) 市場領域ロードマップの更新

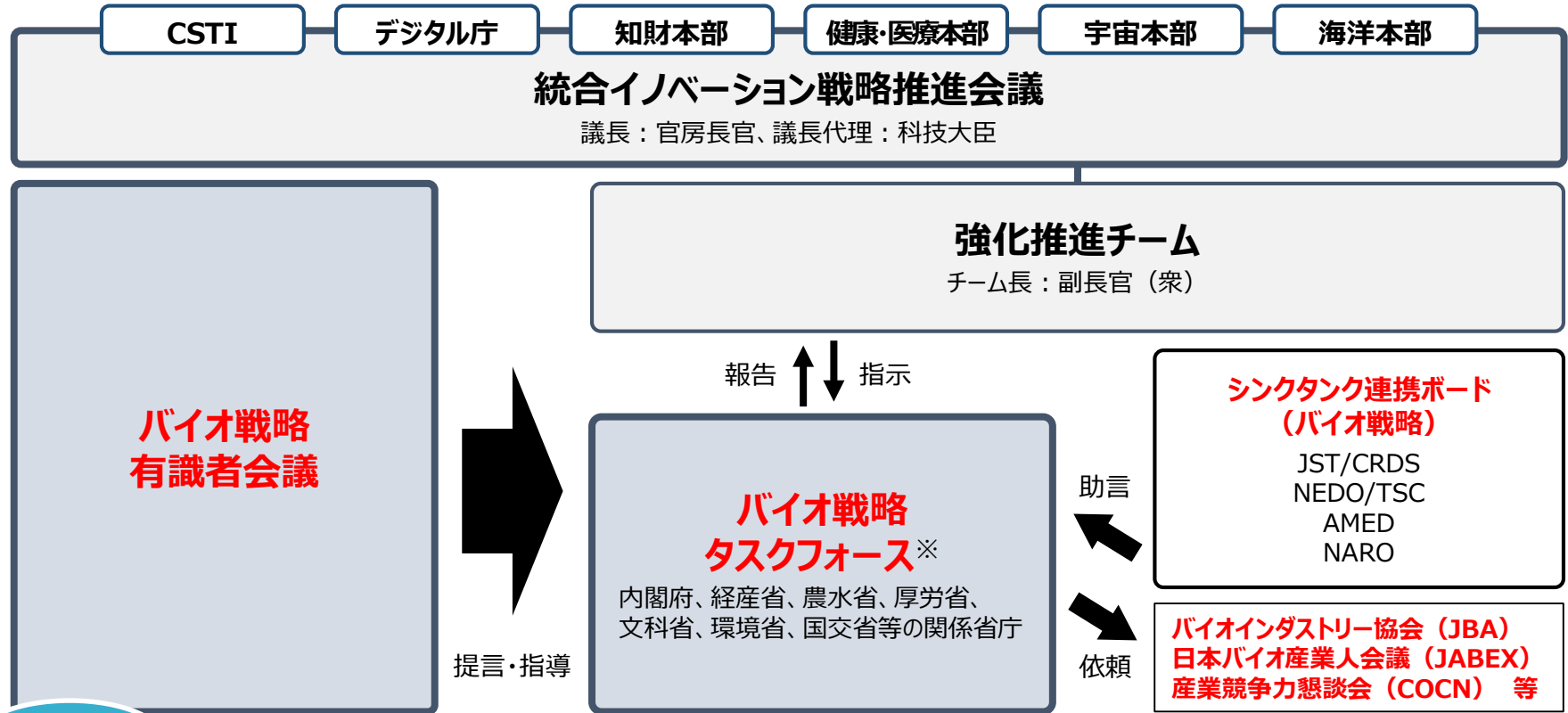
- ・ **【変更】** バイオ戦略に基づき策定した市場領域ごとのロードマップについて、EBPMを徹底する観点から、目標やKPIと成果のギャップを明確にした上で、その要因を分析し、目標を達成するストーリーの予見性の更なる向上につながるよう、今後取り組むべき事項の精査・重点化等を図る^[3]。【**健康医療、科技、文、厚、農、経、国、環**】

^[1] 各市場領域ロードマップのフォローアップで用いられるデータを利用。

^[2] バイオフィースト発想、バイオコミュニティ形成、バイオデータ駆動の観点からの評価を想定。

^[3] 市場領域ごとに過度な縦割りとならないよう留意の上、複数の市場領域について一体的に検討を行うこともあり得る。

バイオ戦略の検討体制



構成員

※必要に応じ、有識者会議構成員の参加、同構成員以外からのヒアリング等を活用



座長：永山 治
一般財団法人
バイオインダストリー協会
理事長



小林 憲明
元キリンホールディングス（株）
取締役常務執行役員



永井 良三
自治医科大学
学長



藤田 朋宏
（株）ちとせ研究所
代表取締役CEO、
京都大学特任教授



吉澤 尚
GRIT Partners
法律事務所
所長弁護士

検討経過

2021年

9月1日

バイオ戦略有識者打合せ

⇒ 「検討の方向性(たたき台)」について議論

12月15～24日

バイオ戦略タスクフォース関係省庁との調整

⇒ 「検討の方向性(たたき台)」について意見照会

⇒ これに必要な修正を加え、「基本的考え方(素案)」を準備

2022年

3月10日

バイオ戦略タスクフォース

⇒ 「基本的考え方(素案)」を基に、更に議論

⇒ 2022年度のバイオ戦略のフォローアップに議論状況を反映

4月4日

バイオ戦略有識者会議

⇒ 「基本的考え方(案)」を基に、更に議論

⇒ 「基本的考え方」を決定

※今後はタスクフォースにおいて、柔軟な見直しを可能とする